

1 哲学について

1 哲学への準備

「— 学とは何か」という問いはそれが何を問題にし、どんな方法を使っているかを知れば大抵は想像がつく。詳しく知りたければ、関連のテキストを読むことで答が得られるだろう。だが、哲学は個別科学と違って、その対象や方法が多様で、定まっていない場合すらある。そこで、このテキストを読み進める準備として、まずは問の形の柔軟体操から始めることにしよう。

問 1：次の話を読んで、下の問に答えなさい。

コンビニで買い物をし、代金が 1004 円と言われた。財布を見ると 1000 円札 1 枚、5 円玉 1 個、それに 1 円玉が 3 個だった。残念ながら 1 円玉は使えず財布に残ったままだと思いつつ、1005 円払い、つり銭をもらった。つり銭は 1 円で、財布の中の使ってしまったかった 3 枚の 1 円玉と合わせれば 4 円になるので、これ幸いと 4 円を再度レジの従業員に出し、「きっかり 4 円あるので、これを出すから、先ほど払った 1005 円の 5 円は返して下さい」と頼んだ。

この遣り取りから、客と店のいずれが得をし、いずれが損をするかを説明しなさい。

問 2：点から線はつくれますか。また、線を分割していくと点になりますか。

(解答) この問は目新しいものではないし、参考文献を参照しなければわからないといった問でもない。だが、Yes か No かの解答とその理由は次のように分かれてしまう。

[解答 1]

点には部分がなく、それゆえサイズが**ない**。サイズのない点をいくら集めてもサイズが生まれるはずがない。点からスタートする限り、サイズの生まれる原因や理由がどこにも見当たらない。だから、「延長のないものから延長は生じない」、「何ものも理由なしに存在しない」といった形而上学の原理に従って、上の各問いについての答えは No である。

[解答 2]

区間 $[0,1]$ が 0 と 1 の間にある個々の点からできているように、実数の集合は個々の実数を要素に含んでいる。点から線ができ、線は点に分解できる。線は点の集合であり、点は線の要素である。面や空間についても同様で、それゆえ、上の各問いについての答えは Yes である。¹

もっともらしく見える二つの解答を示されると、私たちはいずれの解答が正しいのか、そしていずれが常識的な考えとして認められている解答なのか迷い始める。二つの正反対の解答を見て、常識が明瞭に理解され、共有されているのではないことを示す証拠だと思える人もいるだろう。さらに、今の常識より古い常識がまだ残っているからだ、あるいは新しい考え方が侵入したからだと思える人さえいるだろう。いずれにしろ、正解は[解答 2]である。

問 3：無知の知か、知ったかぶりか？

「無知の知」を考え直すことから、「知ったかぶり」が知識の本質であるという非常識な議論を以下に展開します。それに反論できなければ、あなたの負けで、その結論を認めなければなりません。それが議論し、納得し

¹ [解答 1]の真意は「0 をいくら加えても 0 のままである ($0+0+\dots+0+\dots=0$)」という命題を思い起こせばわかるだろう。[解答 2]は「サイズのない点を集めるとサイズ(長さ)のある線ができる」ことを納得できるかどうか鍵となっている。

て理解することであり、ヨーロッパ哲学の伝統であるからです。

プラトンの『ソクラテスの弁明』によれば、「だれもソクラテスより知恵あるものはいない」というアポロンの神託は、はじめはソクラテスにとって「謎」であった。彼は「自分が知恵ある者だなどということには全く身に覚えがない」という「無知の自覚」と「神が嘘を言うはずはない」という「神の信仰」との間にはさまれて、アポリアに陥ったからである。そこで、神の神託が誤りであることを示そうと、世間で知恵ある者だと思われている三者—政治家、詩人、手職人—のもとを訪れた。そこで彼が見出したのは、それぞれ「自分が知恵ある者だと思っているが、実はそうではない」ということと、彼自身は、例えば善や美などということを実際に知らないもので、彼らのように知っているとも思っていない」ということであり、この無知の自覚の点で自分の方が彼らより「ほんの少しばかり」知恵があるということだった。こうして神託の謎は解け、それが反駁されない真理であると悟った。しかし、ソクラテスは、彼を知恵ある者だとする世間の人々の偏見を前にして、神のみが知恵ある者だと主張する一方、この神託を「人間たちよ、お前たちの中では、ソクラテスのように自分は知恵については全く価値のない者だと自覚している者が最も知恵ある者なのだ」と一般化して解釈したのである。

知ったかぶりをするのが人間の常であるが、知ったかぶりが知識の悪用を諷めるための反面教師の例であることもよく知られている。誰も知ったかぶりを褒め言葉としては使わない。しかし、知ったかぶりをするこそこそが知識の本性であり、それがなければ人間が知識を使うことができないという点に、忘れられてきた知識の謎が潜んでいる。知ったかぶりこそ知識の本性だという主張を考えてみよう。

「無知の知」はソクラテスの名言として有名である。ソクラテスが他の人より優れていると言えるのは「自分が何も知らないことを知っている」という点にある、というのがその解釈で、成程と多くの人々を唸らせてきた。だが、「知らないことを知っている」ということは形容矛盾の匂いがしないだろうか。あることを全く知らないなら、それを知っていると知らないとか、といったことは話題にもならない。表面的な理解、聞きかじり、部分的な知識をあたかもすべて知っているかのように（他人に対して）振舞うこと、つまり、知ったかぶりをするを諷めたものとするのが自然で、無難な解釈となっている。

誰も生活に必要なものすべてを自らの手でつくりださない。知識も同じで、すべて自前の知識でないと使えないとなったら不便の上ない。次の例を考えれば、私たちだけでなくソクラテスさえ他人がつくった知識に頼っていることが納得できるだろう。「AがBである」ことがどのようなことなのか、どのような意味なのかを知らなくても、それを使って「BがCである」と組み合わせて、「AがCである」ことを導き出すことができるし、それだけでなくその結果を様々な活動に使うことができる。誰も論理の規則をすべて知らなくてもこの推論は正しいものと受け入れ、活用するだろう。

知らないことがあるのは恥だろうか、それとも誇りだろうか。知らないことを誇るのが「無知の知」の通常解釈である。だが、「知らぬが仏」が成り立つ状況では、ソクラテスはどのように言うだろうか。また、「地震の予知は2割程度しかできない」という状況で、ソクラテスの考えを聞いてみたい。私たち現代人はソクラテスと違って、知らないことがあると心理的に不安になる場合が多い。「無知の知」と言うだけでいったい何か役立つようなことが導き出せるのか。知りたい好奇心や知らなければならない義務や責任があるとき、ソクラテスの格言は何かを教えてくれるのだろうか。

「経験的な知識に完全なものはない」という主張は無知の知を具体的に表現した例文である。経験世界には私たちの知らないことがたくさんあり、そのことを知るのが上の主張である。だが、実際には眼前の対象についてまず知ったことを確認する。知識が完全でなければ使うことができないなどと考える人はいないだろう。不完全な知識と経験的に知った事柄を組み合わせ、それによって知ったことから既知の知識ネットワークに乗せて発展させるのがプラグマティックな知識の使用である。知ったかぶりしなければ知識を使いこなすことはできない。

「知るとは何か」という問いに答えるために必要なのは「知の知」であって「無知の知」ではない。知らないことを知ることが哲学的な洞察の結果などと考えるべきではない。知らないことは間髪入れずにわかることであり、心が確信できるほとんど唯一のものと言っても言い過ぎではない。

問4：君の哲学への思い込み確認

哲学の勉強の仕方から「哲学について君が考えていることを君自身で明らかにする」ことを試みてみましょう。以下の問に答えることによって、自分が哲学をどのように捉えているか再確認できるはずです。哲学から個別的な科学が次々と生まれ出てきた歴史は、哲学とそれら科学が共通の要素をもっていることを示していますが、個別科学と現在の哲学がどの程度共通なのかは判然としていません。

(問) 社会学や人間科学、あるいは経済学を専攻し、実証的な研究をしたい学生はどのような勉強をどのような仕方をするのだろうか。

(問) 自然科学の分野に進んだ友達がその分野の研究の仕方について説明するとすれば、どのような説明になるでしょうか。

(問) 君の関心のある哲学を君が勉強しようとしたとき、どのような勉強をどのような仕方で行いますか。

(問) アリストテレスは『形而上学』でそれまでのギリシャ哲学者の諸説を批判的に検討しましたが、どのような仕方を使ったのでしょうか。また、中世の哲学者たちの哲学の研究はどのような仕方が標準的だったのでしょうか。(「註釈」とは何かを考えてみてください。)

(問) 数学と自然科学の研究の仕方の違いはどこにあるのでしょうか。(なぜ数学が物理学に適用できるかにも配慮してみてください。)

(問) 実験や調査と哲学者の書いた文献を読むことは何が同じで、何が異なるのでしょうか。

どのような哲学の研究が健全な研究か、上の問が君に何かヒントを与えてくれたと思うなら、もう一步踏み込んで、さらに次の問いを考えてみよう。

(問) 現在の知識では説明できないような不思議な現象(例えば、超常現象)が報告されたとき、君ならそれをどのように追求し、解明しますか。

(問) 「わかるものを使ってわからないものを説明する」という原理が哲学の原理として正しいかどうか説明しなさい。

(問) アリストテレスやデカルトが解明しようとした事柄について、君はアリストテレスやデカルトの解明の方法と解明の対象のいずれに関心がありますか。あるいは、カントの考え方とその考え方によってわかるもののいずれに関心がありますか。

(問) 君が今一番知りたい謎は何ですか。それはどのように追求すれば謎でなくなるとおもいますか。

2 哲学の諸問題

[代表的な問題：素朴な疑問]

哲学は私たちの周辺にある謎、驚き、不安を問題という形に仕立て、その解決を目指す、その問題にはどのようなものがあるだろうか。過去に哲学の代表的な問題と考えられてきた幾つかの例を下の(問)で挙げてみよう。いずれの例も一度や二度は自ら疑問としてもったことがあるだろう。しかし、不思議なことに、好奇心を擲る、それら素朴な疑問は日常生活の中でいつの間にか忘れ去られ、そのためか大学で個別の学問を学ぶ場面には登場しそうな問題ばかりである。

(問) 上述の「哲学の問題」と言われているものは次の中のどれでしょうか。そうでない問題はどのような意味で本物の哲学の問題でないのでしょうか。

「神は存在するか」、「マクタガートによれば、時間や空間は実在するか」、「知識とは何か」、「人間は真理を獲得できるとカントは考えたか」、「心と脳はどのような関係にあるか」、「デカルトが言う意識とは何か」、「自由意志はどのようにして可能か」、「倫理的な事実とはサルトルにとってどのような存在か」

[問題の特徴：正解を出すだけでない対応]

これらの問題にはどのような特徴があるだろうか。それらは「2+5 はいくつか」や「石油の化学成分は何か」といった問題とは明らかに違う。すぐにわかるのは、大きな問題で、専門知識なしに抱くことができる問題であること、そして、ただ一つの公式の答がなさそうだとということである。答が一つに定まらなると、人はなぜ解答できないかの理由を考え始める。上の問題のように、答が出にくい問題を抱える哲学では始終このような状況に出くわす。問題そのものが曖昧でどのようににも解釈できるからか。あるいは、まだ解答するのに十分な知識をもっていないためか。知識はあるが、それをどのように組み合わせで解答したらよいか見当がつかないからか。さらには、状況に応じて異なる答があり得るためか。このように考えていくと、問題を解くだけでなく、問題についての方法上、認識上の考察に踏み込んでいることに気づくだろう。問題を解く際に生じる問題を考えるのも哲学の特徴である。今はこのような疑問が上の問題を見ただけで出てくることを確認するだけにしておこう。上の問題の幾つかは後にじっくり考えるが、それらを哲学者がどのように扱ってきたかを知るだけでなく、そのような哲学者と一緒に、現在利用できる知識を最大限に利用して問題の解答を考えてみるのが私たちの目標である。

(問)「ニワトリが先か卵が先か」という問に対する「A hen is only an egg's way of making another egg or a chicken is just an egg's way of making another egg.」という解答について調べ、自分の解答を考えてみなさい。(ヒント: Samuel Butler, *Erewhon*, 1872, Richard Dawkins, *The Selfish Gene*, 1976)

[哲学についての複数の特徴づけ]

上のような問題とその解決の仕方は過去に数多くあり、そこから「哲学とは何か」という性格づけがなされてきた。問題とその答が明瞭であれば、「— とは何か」という性格づけは必要ない。実際、「物理学とは何か」がことさら問題になることはない。物理学の問題の範囲とそれら問題に対する答の一義性が自ずとその内容を示しているからである。しかし、哲学の場合、問題と答は範囲が定まらず、しかも多義的である。すると、「哲学とは何か」について複数の答が出てくることになる。哲学の代表的な性格づけを以下に三つ述べてみよう。

(1) 哲学は「正当化」のための理論である。

ある事実が成立している、あるいは成立していない、ある知識が正しい、あるいは誤っていると言われるとき、それはどのような根拠や理由からそうなのかを説明することが哲学の役割であり、正しい事実や知識を直接見つけるのではなく、それがなぜ正しいのか、あるいは誤っているのかを明らかにすること、つまり、真偽の根拠づけ、基礎づけが哲学の役割である。

(2) 哲学は一般的な事柄に関する理論である。

哲学は個別的で特殊な問題を扱うのではなく、上の問題例にあるように、グローバルな領域にわたる一般的な問題を扱う。物質、生命、精神の領域を細かく分断して問題を解決するのではなく、それらを横断する包括的な視点から問題を扱うのが哲学である。

(3) 哲学は概念を明晰にするための理論である。

哲学の役割は私たちの知的な営み、日常の営みの両方で用いられる概念とそれらの相互の関係を明瞭にし、私たちの思考を健全に保つことである。概念とそれらの相互関係を分析することによって、世界や精神についての知識を明瞭にするのが哲学の任務である。

(問) 哲学の問題例の一つ、例えば「知識とは何か」について、哲学の性格づけ (1)、(2)、(3) のそれぞれの立場からどのような答が想像できるだろうか。

「哲学とは何か」に関する上の答のいずれかが正しくて、他が誤っているというと考えする必要はない。実際のところ、哲学は三つの答のいずれでもあるし、三つ以外の哲学の性格づけさえ可能である。例えば、哲学は理論をつくることではなく、理論以前、理論以外の批判的活動であるということもできる。このような懐の深さを哲学はもっている。これはテキストを読み進むうちに納得できるだろう。